

## 禪僧の文學觀

(夢窓國師の場合)

## 横山文綱

## (一)

中世禪林によつて形成し育成され來つた學問乃至文學を一般に五山文學乃至五山文化と呼稱している。

古來禪の本質は「以心傳心不立文字」<sup>(1)</sup>とされ、禪には學問、文學の介入する餘地は全くなく、むしろ文學を捨てて一途に「見性成佛」<sup>(2)</sup>することを標榜としているのである。即ち蘭溪道隆は「參禪學道者、非三四六文章」<sup>(3)</sup>。宜參<sup>(4)</sup>活祖意<sup>(5)</sup>。莫<sup>(6)</sup>念<sup>(7)</sup>死話頭<sup>(8)</sup>。と誠められ參學者は、四六文章、謂る文學を學ぶことが參學と思つてはならぬ、そういう者は死した話頭を念ずるものであつて、そういう處から活きた祖師の禪を見出すことは出来ぬと示している。參學者の眼目は「一道心堅固、須要見性」<sup>(9)</sup>といはれる如く、何をおいても見性することにならねばならぬ。見性するには「謹莫雜用心」<sup>(10)</sup>で雜用心即ち學問などに心を勞して

いたのではとても禪の蘊奥は手に入るものではないと。「所謂猛烈放<sup>(11)</sup>下<sup>(12)</sup>諸緣、專一究<sup>(13)</sup>明己事」<sup>(14)</sup>ことにならねばならぬことは論ずるまでもないことである。

## (二)

禪林の本來的性格は文學的要素を否定するものである。しかるに禪林に文學が發生したことは如何なる意味を持つものであるうか。

中國に於て發展した禪林が既に彼の地に於て高度の學問文學を持つに至つており、禪文化が日本の五山の特殊的現象として見なすことは出来ない。禪の大陸直輸入という歴史的宿命が文學の發生ということに直接的原因が見られるのである。

玉村竹二氏は大陸に於て「禪林と文學との關係をつけたのは」「禪林の貴族化と官僚化の結果である」としている。

宋時代に禪林の組織が完成して遂に官僚化するに至つたことも一つの原因ではある。然し乍ら更に一步進んで宋の儒者、宋學が禪の影響を受けたことにより、多くの信者と出家者を出したことに大いに原因があるのではないかと思う。

宋儒程明道は禪を學び常に靜坐を行い、定林寺において百丈清規に準じた衆僧の威儀の嚴肅なるを見て嘆稱したことは伊洛淵源錄、杲言等に出ている。程伊川は黃龍山の靈源性清と交渉を持ち熱烈に求道をしておる。又程門の有名な楊龜山も廬山の東林寺常總に就き禪を學び、その他周濂溪、蘇東坡も禪を學んだといわれている。久保田量遠氏は「宋學は禪を基調としてゐるだけに、これを極論すれば宋學即禪であると言はねばならぬ」と主張している。

儒學者の禪接近によつて、儒者の禪林への改宗歸投という現象が出て來た。即ち、偃溪廣潤、雲峰妙高、元叟行端、大川普濟、敬中普莊、妙峰之善、敬叟居簡、夢堂曼卿、行中至仁、及び月林師觀、無見先觀、海雲印簡、龍源介清等は禪林に歸投した人々であるといわれている。中國において一流の文學者と禪僧の知識互換の關係によつて、まず禪に文學が發生する要素が出來上つたといえる。

玉村竹二氏は禪の文學的つながりは「禪宗は直觀を重んじ、言詮を絶する」爲に言語を超えた言語を用いる場合は

必然的に「言語を象徴的に用いる」ということに原因があるとし、又言語の象徴的使用が後の韻文的發展になると主張されておる。私はこれに對して主觀的ではあるがむしろ禪僧の文學者的教養が自ら言語の象徴的使用へと發展したのではないかと思う。かかる禪僧の文學的素養が組織化してくると文學的表現形式が固定化して、禪林の文學的財産として傳承されるのだと思う。(これに就ては別に一章を草する必要がある。)

### (三)

以上の如き傾向は日本へ傳來した鎌倉の禪林に受けつがれ、益々發展して行つた。即ち日本の禪林文學の源流は一山一寧(來朝元僧)に擬定される。一山は元の使節として來朝した高僧で、彼は高い宗教人格と、豊かな文操の持主であつたが爲に日本の公武の崇敬する所となり、北條貞時は一山を建長、圓覺、淨智の諸寺に延請し、後宇多法皇は京都に招いて、南禪寺に勅住せしめられた程であつた。

一山は文學上では雪村友梅、虎關師鍊の二大門人を出し、又龍山徳見、蒙山智明にも感化を及ぼした五山禪林の巨擘である。

夢窓國師(自一二七五至一三五二)(以下國師という)はつとに一山を慕い正安元年(一二九九)鎌倉に下向し掛搭を願つたとこ

ろ、志願者が數十人に及んだ爲に、一山は偈頌の課題を出して試験をしたといわれる。ところが國師は上科に合格した二人の中の一人であつたということである。雲水時代に既に文學的素質に恵まれた國師ではあつた。

雲水時代にかくの如き英才を發揮した國師は「頭惱明徹であつて、事物の分別ということを徹底的に窮めなければやまない性格で」「極めて論理的な考え方に徹する人で典型的な教相家と」まで云われる。

國師は五山禪林の半ばを占める夢窓派の祖であり、五山文學史上重要な地位を占めているのであるが、國師の文學に對する態度には又教えられるものが多い。即ち三會院遺誠において「我有二三等弟子」と言われ遺誠を垂れられたことは有名である。

「所謂猛烈放三下諸緣一專一窮一明一己一事一是爲三上等一、修行不純一駁雜好學謂之中等一。自味己靈一光輝一只嗜佛祖一涎唾一此名三下等一、如其醉心於外書一立一業於文筆一者此是剃頭一俗人也。不足三以作三下等一云々」とせられ、純一に修行もせず駁雜の學問を好む者は僧として中等であり、外書を學んで文筆をこととする者に至つては剃頭の俗人である。下等の僧の仲間にも入らるべきものでは無いというのである。國師は第一に駁雜の學をなす者を戒められ、第二に外書に心酔して修禪を等閑にする者を

戒められたのである。

國師は第一の者、駁雜の學をなす者は、「胸中に難知難解をたくはへて、安排計較するは亦是れ句に參ずる分なり。然らば則ち一切の知解情量を放下して、直に一則の公案をみするは是れ意に參ぜしむる手段なり」ときとして、句に參ずることを止め、意に參ぜよといわれる。第二の者、外道を學ぶ者に對しては、「教門の施設及至孔孟、老莊の教外道世俗の論までもしらずんばあるべからず。今時の學者多くは是れ眞實の道心はなし。名聞我慢を先とする故に、自己もいまだ發明せざるに、禪・教の法門を習學するを努めとす。其の中に一知一解を得れば、やがて善知識をたてて愚人を誑惑し、其の一知一解を人にしめして、若し學者の見解我が知解にかなう時はこれを印證す、大なる錯なり。」と示し、自己も發明せぬものが、名聞我慢のために、教門の施設即ち教相學とか、外道の孔孟の學門や老莊を研究したりするのであつては、眞個の道心のある者の道ではない。僅かに教門の半端な知解を得たらそれでもつて善知識ぶり、學者を引接し、その見解が自己の知解に契つたら印證を與えたりする、これは大なる錯といふべきだとしてゐる。これは當時の禪界の一部の傾向がそこに見られる譯であるが、それを酷評したのだと思う。國師の眼目はどこまでも先づ開語、自己發明をすることにゐる。自己を發し

たものは「努めて」内典外典を習學せよと云はれるのである。

「然らば則ち禪門の宗師同じく一切の學解を放下して、自ら參じ自ら究めよとす、め玉へり」とするのは國師の主張を待つまでもなく、古來禪門の鐵則であらねばならぬ。

又「禪門の學者の中に、宗師の語話を船筏として、教育家の船筏には勝れたりと思うて慢心を起す」學者があつたら、そのような者は、「たとひ大きに勝れたる船筏にのりたりとも、其の中に嬉戯して究竟安隱の想をなきば、一生むなしく此の岸に住著して、船筏の沙汰をだにせぬ者にはまされりといへども、いたづらに河流にただよふて、彼岸にいたらざる」者であるといわれる。即ち教相と宗學とを比較した場合に、宗學の方が禪の本意に副うていて優れている。しかし宗學がどこまでも知解にとどまつていたのでは、彼岸である自己の本分底に遇著することは有り得ぬとされる。國師は更に

「本分に契當せんがために先づ種々の法門を習學して、然して後に其の學解によりて修行せんと思はば、人の命は百年の内を限り、習ふべき法門は無理無邊なり、學ぶ所いまだつきざるに其の命已に終る。此の時日來の學解すべて益なし、茫然として業縁に引かれ輪廻をまぬがれず。」  
自己の本分底を究明するのに、祖錄や語錄を學び、學解に

よつて修行を進めようと思う者があるとする場合、その者の修行が了畢せぬ程に、本人の生命が終つてしまふだろう。それ程學問の場は廣いのである。本分に契當せんには先づ「知解情量の及ばざる處に向つて日夜に提撕」せなければ、「曠劫無明の一時に消滅」することは有り得ぬと云はれる。

#### (四)

國師は觀應二年九月二十六日、未後垂誠に「老僧平生信口道著、却無途轍並是翳睛之術呼小玉之手段也」と示し、「老僧が平生口に信せ」て殘した法語、垂示に道著してはならぬ。これらは皆小玉を呼ぶ手段であつて、本分底から遠ざかつたものである。國師の示さんとする主旨が何人であるか、良く見究めるべきであると示されている。

即ち年譜にもあるが如く「佛祖の言教は小玉を呼ぶの手段なり」なのである。言詮の上に佛法があるのではない。言詮をより處として「言外の旨を領」せなければならぬのである。言外の旨とは正しく本分の田地であり、如實知心に外ならぬのである。

「しかるを今時禪門の學者もまた語錄をよみ文章をたしなみて、其の中の才學日來よりまされる所あれば、大我慢をおこして眞實の語入なき事をば恥らるることなし。」と、禪門の學者が語錄を讀み、文章にしたしむのは、謂る五山

文學を嗜むのは、實は小玉を呼ぶの手段であらねばならぬが、文學を學ぶ方が優れてくると却つてそれに慢心を起して、眞實の悟を忘却してしまう。その開悟の無い事すら恥とせぬ状態であることは嘆げかわしいことであると云われ、國師在世當時の禪林はそういう意味で「末世法滅の相」であると申されるのに、ふさわしい状態であつたと思はれる。

#### 花園院宸記に

今日調<sup>ス</sup>宗峰上人<sup>ニ</sup>禪林寺長老々々參内、御問答之體語<sup>レ</sup>之、日來有<sup>ニ</sup>道者之聞<sup>一</sup>、仍<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>ル</sup>也、而<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>問答者、都<sup>テ</sup>未<sup>レ</sup>出<sup>ニ</sup>教綱<sup>一</sup>、達磨一宗、掃<sup>テ</sup>地<sup>ヲ</sup>而盡、可<sup>レ</sup>悲々々此、趣密々所<sup>レ</sup>語<sup>ル</sup>也、此仁己<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>關東歸依之僧<sup>一</sup>、仍<sup>レ</sup>不可<sup>レ</sup>事等、可<sup>レ</sup>隱密<sup>ニ</sup>之由、有<sup>ニ</sup>時宜歎<sup>レ</sup>、仍<sup>レ</sup>上人不可<sup>レ</sup>□外<sup>ニ</sup>之由示<sup>レ</sup>之、予情<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>之、當<sup>レ</sup>今有<sup>ニ</sup>佛法與隆之寂慮<sup>一</sup>之由風聞、而<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>東方之形勢<sup>一</sup>、還<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>隱密<sup>一</sup>、如何々々、以<sup>ニ</sup>此仁<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>宗門之長老<sup>一</sup>者、即是<sup>ニ</sup>滅<sup>ニ</sup>胡種族<sup>一</sup>、不可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>悲歎、

とあることは國師理解の爲に重要である。即ち禪林寺長老とは南禪寺住持のことで、國師に外ならない。宗峰即ち大燈國師は、國師(夢窓)の宗風を後醍醐天皇との問答より察し、これを評してすべてまた教綱を出ないもの、教宗

の要綱即ち論理を出ていない所謂知解であるとし、かくの如き人が宗門の長老になつたのでは、達磨宗は地を掃つて亡ぶだろうと花園上皇に申している。上皇も又この仁を宗門を滅してしまふだろうと申され、悲しみにはえぬことたともらしておられる。林下の大燈國師の批判は政治的には無力であつたと思はれるが、國師が論理の師であり眞の達磨宗の宗風を傳えぬ者ときめ付られることは、國師の宗風はやはりその傾向が強かつたものと思はれる。

宸記にいう教綱は國師が力説される小玉を呼ぶの手段に過ぎぬものである。宗學即ち論理を學ぶのは良いが、先づ本分の田地を究明することを忘却してはならぬ、「專一窮明己事」する者が第一等の僧であつて、唯、好學の者は俗人に等しいと究め付けられる。そう垂誠される國師が滅胡種族の師とまで云はれることはなんとしたものか。國師は自らの弱さを知るが爲の慈悲心の現れでもあるのか。

以上のような國師の立場ではあつたが、門弟義堂周信は「空華集第十七」に於て

「一文一藝、空中小舛。此梁亡名子言也。文章一小伎、於道未<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>尊。此唐杜甫子之言也。如<sup>ニ</sup>子言<sup>一</sup>則文章與<sup>ニ</sup>乎道<sup>一</sup>遠者明矣。而雜華經則說、菩薩能於<sup>ニ</sup>離文字法中<sup>一</sup>、出生文字<sup>一</sup>。又說、雖<sup>レ</sup>隨<sup>ニ</sup>世俗<sup>一</sup>演<sup>ニ</sup>說文字<sup>一</sup>、而恒不<sup>レ</sup>壞<sup>ニ</sup>離文字法<sup>一</sup>。子劉子則說、心精微發而爲<sup>レ</sup>文。如<sup>ニ</sup>此二者說<sup>一</sup>道固

不<sub>レ</sub>外<sub>二</sub>手文字<sub>一</sub>矣。」(文仲説)

この頃澎湃として隆盛になつて來た禪林文學を目の前にして多くの文學僧は、法を主食に文學を菜羹に喩えて、法と文とが兼備されるのを理想としていた様である。周信に於ても雜華經の菩薩はよく離文字法中に於て、文字を出すが如く、世俗の爲には止むを得ず文字を演説するが決して離文字法を壞す様なことは無いとする。又

「凡吾徒學詩、則不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>俗子及第等<sub>一</sub>。蓋七佛以來、皆以<sub>二</sub>一偈<sub>一</sub>見意。一偈之格、假<sub>二</sub>俗子詩<sub>一</sub>而作耳。諸子勉<sub>レ</sub>之。又詩有<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>於吾宗<sub>一</sub>、之<sub>三</sub>超<sub>レ</sub>險詠<sub>一</sub>矣。」<sup>(註1)</sup>といひ、詩文は過去七佛以來皆偈を作つて意中を表現した。このように詩文は吾が宗旨を補足するもので重要なものであるから勉めて險詠するようにというのである。

先に見たように國師の立場は、本分の田地が手に入らぬ裡は、文學などを學ぶべきでないとされた。然しかかる誠めも周信に至ると宗學を學ぶ場合それが補足的手段として、詩文を作ることを認めようとする方向に變化するのである。

(五)

義堂周信はその後に

「今時吾徒坐禪せず、看經せず、但外學に馳騁す。他田

獅子座に登り、人天衆に對して何を説かんとするか、是乃ち佛法滅盡の相なり、痛しい哉」<sup>(註2)</sup>

と嘆き、弟子達が皆競つて外學を學ぼうとしていることは佛法滅盡の相であるといつている。この様な弊害が現れるに至つた遠因はやはり國師に發しているのではなからうか。即ち國師は文學は小玉を呼ぶの手段としてゐることである。小玉は手段であつて目的でないとの力説されたが、手段としてこれを認めてゐることである。國師はややもすると文弱的に流れようとする弟子達を戒めて、回を重ねて注意されたが、否定し切ることの出來ぬ一本の道が残されていたといへる。又前に見た如く國師自身に文學的教養が十分身に付いていたことが、國師の主張をばやけさすことになつたのではないかと思われるのである。

註(1) 血脉論

- (1) 大覺禪師遺誡
- (2) 中峰國師座右銘
- (3) 大燈國師遺誡
- (4) 夢窓國師遺誡
- (5) 玉村竹二著「五山文學」
- (6) 支那儒道佛交涉史、二二九頁
- (7) 玉村竹二著「夢窓國師」九二頁
- (8) 夢窓國師語錄
- (9) 夢中間答(岩波本九三頁)
- (10)

- (11) 夢中間答 (岩波本九四頁)  
 (12) 夢中間答 (岩波本九七頁)  
 (13) 夢中間答 (岩波本八〇頁)  
 (14) 夢中間答 (岩波本八八頁)  
 (15) 夢中間答 (岩波本九七頁)  
 (16) 空華日工集、應安二年九月二日の條  
 西山夜話  
 (17) 遷來叢林に復た一種ありて、専ら外典を學んで業と爲す云々  
 空華日工集、應安四年十二月十六日の條  
 (18)

執筆者紹介

森 暢 氏	花園大學教授	佛教美術史	擔當
荻須純道氏	花園大學教授	佛教史學	擔當
福島俊翁氏	花園大學教授	佛教史學	擔當
柳田聖山氏	〃	教授 佛教學	擔當
木村靜雄氏	〃	教授 禪宗學	擔當
柴野恭堂氏	正眼短期大學監・教授		
藤吉慈海氏	京都大學人文科學研究所助教授		
阿部正雄氏	奈良學藝大學助教授		
藤 直幹氏	大阪大學教授・花園大學講師		
稻岡順雄氏	花園大學教授	宗教學	擔當
市川白弦氏	〃	教授 佛教學	擔當
大石守雄氏	〃	助教授 佛教史學	擔當
横山文綱氏	禪文化研究所員		
小林圓照氏	花園大學助手		
平田高士氏	〃	講師 禪宗學	擔當